



TITLE:

Terttu Nevalainen and Elizabeth Closs Traugott (eds.), *The Oxford Handbook of the History of English*, Oxford, Oxford University Press, 2012, xxxix+942pp.

AUTHOR(S):

家入, 葉子

---

CITATION:

家入, 葉子. Terttu Nevalainen and Elizabeth Closs Traugott (eds.), *The Oxford Handbook of the History of English*, Oxford, Oxford University Press, 2012, xxxix+942pp.. *Studies in English Literature* 2015, 92: 180-184

ISSUE DATE:

2015-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/242886>

RIGHT:

© 2015 一般財団法人 日本英文学会; 許諾条件に基づいて掲載しています。; 一部非表示の箇所があります。

180

書

評

Terttu Nevalainen and Elizabeth Closs Traugott (eds.),  
*The Oxford Handbook of the History of English*

Oxford: Oxford University Press, 2012. xxxix + 942 pp.

1990年代以降、言語研究の分野で500～1,000頁、あるいはそれを超える handbook の出版が相次いでいる。歴史言語学や英語史に関するものでは、Blackwell の *The*

*Handbook of Historical Linguistics* (2003)、*The Handbook of the History of English* (2006) などに続き、2010年代になると、*English Historical Linguistics: An International Handbook* (De Gruyter Mouton, 2012)、*The Routledge Handbook of Historical Linguistics* (Routledge, 2015) などが次々に刊行された。*The Oxford Handbook of the History of English* (本書) も、この流れの中で編纂された一冊である。900 頁を超える本書を章ごとに要約することは現実的ではない。本書は大きく 4 つのパートから成り、各パートに 2 つのテーマが割り当てられているので、小論では、これを手掛かりに全体を概観することにする。各テーマには、異なる著者による 7~11 本の論考が並び、その最初のものがテーマの導入を行う組み立てになっている。

まずパート I の Rethinking Evidence は、*Evidence* (1~11 章) と *Observing Recent Change through Electronic Corpora* (12~19 章) から構成される。前者には、碑文、写本からコーパスに至るまでの、さまざまな言語資料に関する論考が含まれており、資料の幅が伝統的なものから電子的なものにまで、確実に広がって来ていることがわかる。やや残念に感じられるのは、各章の分量が限られているため、内容が極端に概観的であることである。たとえば第 8 章の “Evidence from surveys and atlases in the history of the English language” (W. A. Kretzschmar & M. Stenroos) には、いわゆる fit-technique についての議論があるが (pp. 115-16)、読者がここでの記述だけで fit-technique を理解できるとは考えにくい。すでに fit-technique を知っている読者のための記述になっている。このように、紙幅の関係で概観的すぎるという問題は、本書を通じて多くの章に当てはまるので、最初に述べておきたい。

パート I の前半がいわば「資料と方法」についての議論を行っているのに対し、後半の *Observing Recent Change* では、コーパスを利用した多数の研究事例が提示されており、前半との重複感は少ない。コーパスに特化したことで、コーパスのあり方についての議論も導入されており、中でも興味深いのが、その規模に関するものである。冒頭の第 12 章、 “Some methodological issues related to corpus-based investigations of recent syntactic changes in English” (M. Davies) が大規模コーパスを支持する一方、その直後の第 13 章、 “‘Small is beautiful’: On the value of standard reference corpora for observing recent grammatical change” (M. Hundt & G. Leech) は、規模をおさえたコーパスの意義を検証する。両者に議論の歩み寄りは見られないが、結局のところは、研究目的に応じた使い分けが求められるはずである。たとえば、第 16 章の “Revisiting the reduplicative copula with corpus-based evidence” (A. Curzan) は、the difference is is のように一見したところ誤用とも感じられる用法を扱うが、このような研究には大規模コーパスが不可欠であろう。意識的であるかどうかは別として、*Observing Recent Change* の各章が、具体的な言語研究を通して、結果的に、大規模コーパスあるいは小規模なコーパスの有効性を実証しているところが興味深い。

次にパート II の Issues in Culture and Society は、*Mass Communication and Technologies*

(20～27 章)と *Sociocultural Processes* (28～36 章)から成る。*Mass Communication and Technologies*の各章は、著者の興味に応じて、communicationを中心に論ずるもの、technologyを中心に論ずるものがあり、全体としては、話し言葉と書き言葉、ジャンル、印刷技術の導入からコーパスに至る技術の進化、さらには言語研究の方法の変容、というようにテーマが深められている。現代に至るまでの言語と技術にかかわる壮大な歴史が扱われている一方で、著者の多くが近現代以降を専門領域としているため、やはり近年についての議論に焦点が当てられる傾向も見られる。たとえば、第20章の“Technologies of communication” (T. Kohnen & C. Mair)は、コーパスが研究の性質の変容をうながしたことに言及する一方で、“On the other hand, fewer and fewer historical linguists go back to the actual manuscripts or even read the texts they quote their examples from” (p. 281)と述べる。事実である場合も多いが、実際にはIT技術の恩恵を受けているのは、写本研究についてもいえることであり、中世研究の性質が大きく変容してきているのもまた事実であるはずである。このような観点は、本パートには見られない。

パートIIの後半、*Sociocultural Processes*に収められた論考は、social networkやpolitenessなど、社会言語学や語用論の視点も取り入れながら、人間の言語活動の細部に関心を向けているところが特徴的である。前半の*Mass Communication and Technologies*がテキストをテキストとして見た場合の「ジャンル」を扱うとするならば、*Sociocultural Processes*での議論は、どちらかといえば、その言語活動の背景に存在する人間に焦点を当てているといえる。たとえば第35章の“Perceptions of dialects: Changing attitudes and ideologies” (C. Montgomery)は、方言そのものではなく、方言に対する人々の意識を議論の対象とする。同論考は、文学の言語にも言及し、文学作品で当時の英語がどのように映し出されているかよりも、当該の言語表現がどのような象徴的な意味で捉えられていたかが重要であるという。Shakespeareへの言及がある一方でChaucerを含む中世にさかのぼらないのは残念であるが、興味深い考察である。

パートIIIのApproaches from Contact and Typologyには、*Language Contact* (37～47章)と*Typology and Typological Change* (48～54章)の二つのテーマが配置されており、双方に共通しているのは、これまでの英語史の「見直し」である。*Language Contact*に収められた章の多くが、これまで英語史で必ず扱われてきたラテン語、スカンディナヴィア語、フランス語だけではなく、ケルト語や、アジア、アフリカの英語などにも関心を示す。また、code-switching、creole、pidginなど、社会言語学の枠組みを利用しながら、言語と社会の関係を論ずるのも、上述のパートIIと同様であり、本書全体の特徴にもつながっている。特に、New Englishesをコロニアリズムとの関係で扱った第45章、“Contact-induced change in English worldwide” (E.W. Schneider)には、“Obviously, in the emergence of New Englishes contact linguistics touches

closely upon Second Language Acquisition, given that these varieties are given birth as second-language forms with bilingual speakers, and their properties are frequently (though not exclusively) shaped by contact effects such as borrowing, structural transfer, phonetic interference, etc.” (p. 575) のような記述もあり、英語史が社会言語学ばかりでなく、言語習得にかかわる領域にも接点を見出す可能性を示している。

一方、パート III の後半、*Typology and Typological Change* における「見直し」は、主に研究の枠組みの見直しである。たとえば第 48 章の “Typology and typological change in English historical linguistics” (B. Kortmann) は、英語史のさまざまな研究は typology との関連付けが可能であるとし、functional typology、diachronic typology などの用語を用いながら、研究分野の融合をはかる。これは、分野についての視点を変える「見直し」の試みであろう。また、研究方法を変えることによる「見直し」の議論もある。統計学を駆使した第 52 章の “Analyticity and syntheticity in the history of English” (B. Szmrecsanyi) は、closed class、open class の語彙の分析から、17 世紀以降、英語が再び synthetic な傾向を強めているという興味深い指摘を行っている。同じく統計学を利用した第 54 章の “Toward an automated classification of Englishes” (S. Wichmann & M. Urban) も野心的で、pidgin や creole も含めた英語の変種の分類を多変量解析で試みている。境界線を引く伝統的な dialectology からの脱却の可能性に言及するが、この考え方自体は、すでに中世研究では、A. McIntosh, et al. の編纂による *A Linguistic Atlas of Late Mediaeval English*, 4 vols. (Aberdeen, 1986) に見られるものである。この点への言及はない。

最後に、パート IV の Rethinking Categories and Modules には、*Cycles and Continua* (55～61 章) と *Interfaces with Information Structure* (62～68 章) が含まれている。*Cycles and Continua* に配置された論考の多くが、パート III に引き続き、伝統的な境界を超えた融合を提案する。たとえば冒頭の第 55 章、 “Cycles and continua: On unidirectionality and gradualness in language change” (R. Bermúdez-Otero & G. Trousdale) は、gradience の概念を積極的に用いながら、phonology、morphology、syntax、lexicon などの伝統的な分野の境界を超える試みを行う現代的な章である。同様に、第 57 章の “The syntax-lexicon continuum” (C. Broccias) は、*-ingly* 副詞の発達を手掛かりに、syntax と lexicon の境界を克服する試みを行う。Broccias がこれまでの英語史について、 “Standard accounts of the history of the English language . . . have separate chapters on syntax and vocabulary. The underlying assumption is that the two are regarded (either implicitly or explicitly) as separate linguistic components” (p. 735) と述べるのは象徴的であり、本書で繰返し強調される分野の融合は、いわば伝統的な英語史と本書を分かち一つの特徴になっているということもできる。

後半の *Interfaces with Information Structure* に収められた論考も、この点で注目に値する。これまで生成文法の立場で英語の語順の分析を行う傾向が強かった著者たちが、一斉

に information structure の概念を用いて、英語の基本語順の変化、およびそれに付随するさまざまな言語変化について議論を行い、communication や discourse の視点から、syntax を論じている。ただし、詳細には差異があるものの、主張するところはどれもほぼ同一で、やや重複感を否めない。また、コーパスによるデータの解析や談話機能の分析に焦点が置かれているにもかかわらず、用語だけが生成文法的な章も多く、本書の性質を考えると、読者への配慮をもう少し期待したいところである。とはいえ、英語史を取り巻く環境が大きく変わり始めているのを感じさせる一連の論考であることは間違いない。

以上、紙幅の許す範囲で、筆者の視点を交えながら、各パートを概観した。最初の本格的な史的コーパスである Helsinki Corpus が公開されてから 20 年以上が経過し、方法論の変化はもちろん、英語史そのものが大きく変容してきているのを感じる。コーパスの利用により言語使用の細部の分析が可能になり、研究の全体像が変わってきた。ジャンルやスタイルの概念が英語史の中にますます積極的に取り入れられるようになったのはもちろんのこと、社会言語学や談話機能の分析など、以前は現代英語研究において力を発揮していた領域が、確実に英語史の一部になりつつある。また、グローバルゼーションなど、現代に生きる私たちの周りにも外面史的な変化はあり、このことが World Englishes など、これまでの英語史ではやや周辺的な扱いにとどまっていた領域を積極的に取り込むことにつながっている。本書は、網羅的ではない。編者の研究の関心を反映して、どちらかといえば近代英語期以降、特に現代に詳しく、残念ながら中世は手薄である。また全体として、方法論的な色彩が強く、言語現象そのものに関心をもつ読者は、物足りなさを感じるであろう。各章が短く、中途半端な感覚が残る章も少なくない。一方で、読者が何らかの形で有している既成の枠組みを外すのには最適であり、むしろそのためにこそ本書を利用すべきであろう。

京都大学

——家 入 葉 子